

新潟大学 創生学部

異なる学問分野の学生と教員が相互に刺激し合い
オリジナルな学びを創造して課題解決へと向かう

Point

- 1年次に企業や行政で実習を行い、課題意識を明確にすることからスタート
- メンバーやテーマが変わる基礎ゼミで、文理融合的な考え方をトレーニング
- 専門教育は他学部で履修するものの、ゼミや卒業論文は創生学部の教員が指導

自分の知らない世界に勇猛果敢に飛び込み
他者を巻き込んで課題に挑むマインドを育成

新潟大学では全学の教育理念として「自律と創生」を掲げており、創生学部はその理念を冠した学部として2017年に創設された。その背景について熊野英和副学部長は、「社会が発展して世の中がどんどん複雑になってきた結果、単独の学問分野だけで解決できる問題が少なくなってきたこと、学生が受け身になり主体的に学ぶ姿勢が見えなくなってきたことの2つがあります」と語る。

そこで、学生が課題意識を持って、さまざまな学問分野から必要に応じて主体的に学んでいく教育システムが構想された。それが「学びを“創”り、未来を“生”む。」をキャッチフレーズとする創生学部の誕生につながった。

ここで重要なのは、学問の枠組みをベースにした一般的な学部と違って、入学時点では4年後にどのような分野の知識やスキルを身につけていくのか、決まったルールが敷かれていないことだ。学生の課題意識によって、学ぶ分野も学び方もまったく異なるものになるからだ。

しかも、課題意識を明確にするためには、幅広い視点から社会を見ることが必要であり、その視点を獲得するためには、どうしても文理融合の学びが必要になる。もちろんその課題を解決するときも、文理融合のアプローチをとる。したがって、創生学部の学びは必然的に文理融合になる。

「大学で学んだことは数年で古くなります。ですから、どんどん自分の興味を広げていきながら、文系・理系のジャンルを問わず、新しい世界に勇猛果敢に飛び込み、



熊野英和 副学部長 田中一裕 教授

他の人を巻き込みながら課題解決へと進んでいく姿勢が求められます。創生学部ではそんなマインドを持った学生を育てたいと思っています」(熊野副学部長)

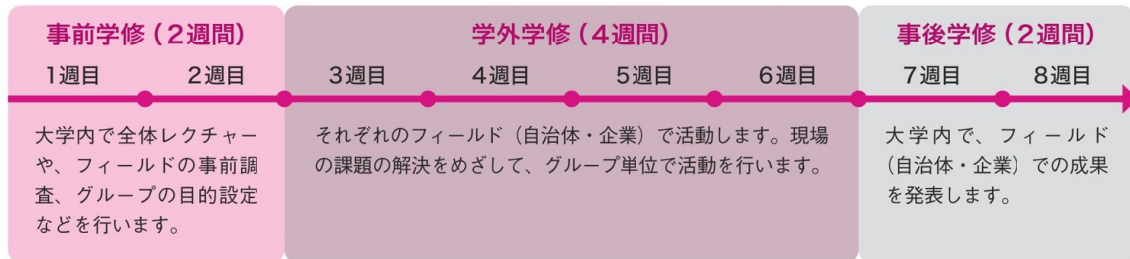
1年次で自らの学びの方向性を明確化し
2年次以降の専門分野の学修につなげていく

学びの出発点を課題意識としているため、1年次のカリキュラムは、課題意識を明確にするための教育に力を注いでいる。データサイエンスや国際関係、語学などの教養系の科目も用意されているが、もっとも重視しているのは「リフレクションデザイン」と「フィールドスタディーズ」の2科目だ。

「リフレクションデザイン」は、4年間の学びをデザインしていくための学びで、自分がどんな分野に興味を持っているか、その分野でどんな社会課題の解決に取り組みたいのか、そのために4年間でどんな学びが必要になるのかをはっきりさせる目的がある。

「フィールドスタディーズ」は、企業や行政の職場に入って現実の課題に向き合う実習授業で、4週間にわたり週3日、朝から晩まで現場に張りつく形で行われる<図>。

＜図＞フィールドスタディーズの流れ



(新潟大学創生学部 2022学部案内をもとに作成)

「一般的なインターンシップと異なるのは、事前に企業や行政との間で課題解決のテーマを決めていることです。実習期間中、学生は社員や職員と行動を共にしながら、課題に立ち向かっていくことになります。創生学部の全教員が総出で指導を行うほど力を入れている科目で、学生にとっては非常にハードな実習ですが、自分の興味・関心と、社会課題をはっきりと結びつける上でとても効果的な科目だと自負しています」と田中一裕教授は語る。

2年次以降は、「21の領域学修科目パッケージ」から自分に合った専門領域を選択し、専門的な学びを深めていく。これらのパッケージは、新潟大学の他学部が提供している専門授業科目で構成されており、創生学部の学生は、専門科目の授業は他学部で履修することになる。

専門教育を他学部委ねる一方で、創生学部ならではの教育も継続する。それが1・2年次合同で行われる「基礎ゼミ」だ。1年次と2年次の学生をそれぞれランダムに組み合わせて1・2年次混合のグループを作り、課題解決に取り組むもので、半期ごとにメンバーも分野も変わる。誰と組むか、どんなテーマに取り組むのかについても、学期始めに割り振られる。指導する教員のアプローチも多種多様である。

「2年次になれば、学生は各自で専門の領域を持っていますが、基礎ゼミでは領域がまったく異なる初対面の学生と課題解決に取り組まなくてはなりません。こうしたゼミを2年間で4テーマ繰り返すことで、コミュニケーション能力や、他分野の考え方を受け入れていく柔軟性が鍛えられていくのです」(田中教授)

専門分野は他学部で学ぶ一方で 卒業論文指導は創生学部の教員が担当

創生学部では、専門教育を他学部で受けてはいても、3年次からの専門ゼミや研究室活動は創生学部の教員の下で行われる。卒業論文指導もその教員が担当する。

教育学が専門の田中教授のゼミには、農学や法律、人文を専門に学ぶ学生も所属し、工学が専門の熊野副学部長の研究室にも、歴史学、経済学、農学の学生も所属している。互いにまったく異なる専門分野の学生が集まって、専門が異なる分野の教員の下で卒業論文を仕上げていくわけで、これまでの日本の大学教育にはほとんどなかったシステムといえる。

「教員も専門と異なる分野を勉強しなければなりませんし、必要なら他学部の教員とも連携します。学生もこの環境に強い知的な刺激を受けているようです。学生と教員が学問の垣根を越えて学び、指導する方法は、文理融合を謳う学びにとって非常に有益で、創生学部の教育を象徴していると思っています」(熊野副学部長)

学問ではなく課題意識を出発点にしているという以上、最終的な卒業論文も学問の領域で縛らないのは、まさに創生学部の理念に沿ったものといえる。教員はファシリテーターやコーディネーターの役割を担うことが多くなるが、だからこそ学生が主体的に取り組む姿勢が醸成されている。

最後に田中教授に高校生へメッセージをいただいた。「高校では、探究活動が始まっています。社会課題に興味を持ち、大学でも探究し続けたい方は『研究』に変えて続けることもできます。今社会が求めている力を身につけて研究をしたい学生を創生学部では歓迎します」

文理融合の学びが
求められる背景総合科学部
広島大学共創学部
九州大学創生学部
新潟大学融合学域
金沢大学高校生の文理選択
コラム